第 11 章　奉行所刃傷事件

1）刃傷事件

矢部が奉行の座について約２か月。　６月になって思わぬ事件が発生した。

町奉行に就任した矢部は、その職権で更に御救米事件の探索を続けるかと思いきや、さにあらず。　むしろ五郎左衛門たちの行動を、飢餓に苦しむ江戸町民を救済するために止むを得ないものとして容認し、事を荒立てる事なく穏便に済まそうとした。

もともと、この事件を蒸し返したのは奉行の座を獲得するための方策であったから、当然の事であった。

五郎左衛門に対しては謹慎あるいはお暇（引退）程度の処分で穏便に済まそうとしたが、矢部が想像もしなかった事件が奉行所内で起きた。

この日の朝 10 時ごろ、南町奉行所の吟味方（御詮議役）下役同心を勤めて佐久間伝蔵が、同心堀口六左衛門の倅で同心見習の貞之助に突然切りかかるという刃傷事件を起こしたのだ。

この事件について藤岡屋日記は次のように記している。

―於南御番所騒動一件

矢部左近将監組同心　　吟味方下役及刃傷自殺　佐久間伝蔵

同　　即死　堀口貞五郎

同物書役　　深手　高木平次兵衛

右貞五郎義、趣意不相分、昼八ツ時頃、於矢都左近将監御役宅詰書物致罷在侯処、伝蔵罷越、一刀で首打落し、次に平治兵衛江深手為負候よし。

堀口貞五郎は奉行所内で書物をしていたところ、佐久間伝蔵が堀口に切りかかり、一刀のもとに貞五郎の首を切り落とした。　さらに止めに入った同心高木平次兵衛（平兵衛という文献もある）をも深手を負わせた。　佐久間はその場で自分の喉を突いて自害して果てた。

しかし、佐久間が本当に殺害しようと思っていたのは堀口六左衛門だった。　だがその日、六左衛門がなかなか出勤して来ず、たまたま倅の貞五郎が出て来たので思わず切りかかった、というのが真相のようだ。

稲垣史生編「武家編年事典」に、三田村鳶魚の「捕り物のはなし」を引用して、この刃傷事件を取り上げているので、これを紹介する。

―伝蔵は年番所へやって来て、堀口の来るのを待っていた。　ところが、どうしたのか堀口が出勤しない。　昼すぎになって吟味方下役に出ている堀口の倅の貞五郎が、何の用があったのか出て来た。それを見ると佐久間は一刀の下に首を打ってしまった。

続いて出て来た高木平次兵衛をも斬った。この高木は、堀口のために矢部に渡す資料を蒐集する手伝いをした者だ。　変を聞いて伝蔵の弟の相場某が駆け付けて取り押さえよ

うとする間に、伝蔵は年番所の柱に寄りかかったまま咽喉を突いて落命した。　そのあとへ目指す堀口が出勤したので、遅刻したために刃傷を免れることが出来た。

この刃傷事件はお救米事件の序章として、松本清張の「天保図録」ほか多くの小説に紹介されている。　その一部を巻末史料編に紹介した。

２）事件の背景

この事件の裏側には五年前のお救米買付にあった不正事件をめぐる関係者の対立があり、その原因を作ったのがほかならぬ矢部駿河守だったと言われている。

お救い米の買付に不正があったのではないかと疑いを持った勘定奉行の矢部定謙は、調査をはじめるがなかなか関係者は口を割らない。　そのうちに矢部が西の丸留守居役という閑職に左遷されてしまう。

しかしあきらめない矢部はその後も買付に関係した仙波太郎兵衛や奉行所同心を呼び出して調査を続けた。

その同心の１人、堀口六左衛門は、はじめはかたくなに沈黙を守っていたが、矢部との間に何か取引条件が整うと、お救い米買い付の内情を話し始めた。　しかもすべては五郎左衛門と佐久間のせいで「私には何の責任もない」と主張したのだ。

堀口が部外の人間に内情を話すことになった事情はあきらかではないが、小説などでは矢部が奉行になったら堀口をある役職につけるという約束があったとするものが多い。

佐久間はこのように上司五郎左衛門の恩を仇で返し、しかも仲間を売る堀口の言動を怒り、殺害しようと思ったのだ。

奉行所内の事件は奉行の矢野にとっては失態であるので、佐久間が気狂いしたことにして内密に処理しようとしたが、やがて鳥居忠耀の知るところとなる。

与力や同心の事件は町奉行の管轄ではなく武家の監察にあたる目付の権限であり、その目付職にあったのが鳥居耀蔵であった。

この変事を聞いて御徒目付が検視に来たが、矢部は前奉行の筒井を追い落とすために堀口に内通させ、それが佐久間の疑念を呼び、刃傷事件の原因となったことを隠して、佐久間の発狂が原因であると言い切った。

しかし矢部が、奉行就任前はあれほど熱心にお救い米の買付けについて調べ、それをもとに筒井を奉行の座から引きずりおろし、自ら町奉行の座につくと、その追求をすべてやめてしまい、関係者の処分を行っていないのを見て鳥居は矢部の取り扱いを変だと思った。

目付まで出世し、時の権力者水野忠邦の覚もめでたい鳥居は、さらなる出世のステップとして旗本の最高のポストである町奉行職に大いなる野心を持ち始めていた。

鳥居の心中に、これをネタに矢部を奉行の座から蹴落とし、自分が町奉行になろう、という意識が徐々に固まって来た。

最後には自殺の道を選んだ伝蔵は、長い間、五郎左衛門の部下として働いていた。　公私ともの付合いがあったようで、五郎左衛門の出来の悪い息子・鹿之助が出奔した時には、伝蔵が出奔先まで出張り、鹿之助を江戸に連れ戻している。（第九章　鹿之助参照）
伝蔵も五郎左衛門には恩義を感じていたから、自噴も手伝ってこの事件を引き起こしたが、結果的にはお救い米買付に不正があった事が明るみに出てしまい、五郎左衛門を窮地に陥れ、やがて牢獄に送られることになるとは想像も出来なかったであろう。

３）事件後の処理

奉行就任早々、奉行所内で起きたこの事件を、矢部は始めのうちは内々に済まそうとし、すべては佐久間の乱心によるものとして処理しようとした。

事実、この御救米買付にあたって不正とされた事は、当時の慣習からいえば「とるに足らない（三田村）」あるいは「不正といっても、叩けば挨がでるといった程度の不正で、目をつむればつむれる。　目くじらを立てるような不正ではなかった。（佐藤雅美）」といわれる程度の犯罪、事件であった。
また、佐久間の犯行の理由を明らかにすれば、自分と堀口の密約が明るみに出てしまう。

しかし、この事件のことが藤岡屋日記に掲載されるなど、外部にも知れ渡り、もはや内密に扱うことが出来なくなった。
矢部は南町奉行所を「忌中」ということで門を閉じ、月番を北町奉行所に代わってもらうことにした。
旧幕府引継書「南撰要」の南諸事届（国会図書館）に、

—６月 13 日　南町奉行所忌中に付、１４日より吟味出入後日延物は一同不及出旨通達、同忌中に付左衛門尉殿（北町奉行遠山景元）即月番御心得被成候事、忌中御悔明後日可出達

とある。　更にお救い米買い付けについて内部調査を開始した事が伺える。
同じく旧幕府引継書に

—６月 18 日　天保７申年諸式高直之節、商人立替又は買物銭被仰付候者、名前書留可被申聞
—７月９日　　去る申年より昨子年まで五ヵ年分町入用写差出可申

とあり、５年前のお救い米買付の時、立替あるいは資金供出を命じられた商人のリストを作り、町年寄にはこの５年間の町入用の明細を提出するよう命じているのだ。

なお、この事件の扱ったいくつかの小説などで、事件発生を６月 29 日としているものが多い。　これは三田村鳶魚の「捕物のはなし」に６月 29 日とあり、これを引用しているからとい思われる。
しかし、藤岡屋日記の記事や、上記の旧幕府引継書「南撰要」の記事から、実際には６月

２日であったことが明らかである。

　ちなみにこの年の６月２日は、太陽暦でいえば７月 19 日。　「月岑日記」によればこの数日は「天気よし」と記録されており、梅雨も明け、天候の安定した盛夏であったことがうかがえる。

４）小説に取り上げられた刃傷事件

　この事件は多くの小説にも取り上げられている。　どのくらい真実に近いかわからないが、状況を理解しやすいので松本清張「天保図録」の一部を紹介する。

（前略）六月二十九日に南町奉行所内年番所で刃傷が起こった。その下手人は年番方下役佐久間伝蔵という者であった。年番方というのは会計事務を取り扱う役である。

　殺されたのは吟味方下役・堀口貞五郎と、年番方下役高木平兵衛という者である。

　その朝、佐久間伝蔵は定刻に年番所にきて事務を執っていたが、初めから顔色が悪かった。それにそわそわして落ち着きがない。　同僚が怪しんで訊くと、ただ気分が思いと云うだけで、すすめられても帰ろうとしない。

　佐久間は南町奉行所定廻筆頭堀口六左衛門の出勤をひたすら待っているようなふうだった。六左衛門は容易に顔を見せない。同僚は佐久間伝蔵が堀口に特別に申し立てることがあって不快をがまんしてまで執務しているのかと思っていた。

　そのうち午過ぎになって堀口六左衛門の伜、堀口貞五郎が何かの用事でひょっこりと顔を出した。佐久問は貞五郎の顔を見ると、「堀口殿」、と呼んだ。この息子も親父によく似ているが、興奮した佐久間は貞五郎を見て六左衛門と見誤った。

　貞玉郎が笑って首を振り、出ていこうとするのと佐久間の身体がおどり上がったのと同時だった。　貞五郎の首が血糊といっしょに畳の上に落ちた。佐久間は一刀流の使い手である。

　妙な音が聞こえたので、高木平兵衛がのぞきに来た。その場を見て仰天し、遁げ出すところを佐久問はいきなり血刀を高木の肩先に喰い込ませた。高木が脇差を半分抜いたままよろよろと倒れかかると、その右腕が肩口から削ぎ落とされた。

　この騒動に他の同僚が駆けつけたが、佐久間伝蔵は二人を殺した刀を持ったまま血の海の中に立っている。

「佐久間、乱心したか」

と、一人が云うと、

.「乱心はせぬ。堀口一人を倒したかったのだ。堀口六左衛門を生かしておけば、奉行所の秩序が立たぬ。」

と、謎のようなことを呟いた。

　それから大勢の見ている前で、持った刀を逆に取ると、年番所の柱に凭れかかり、着物の袖を刀身に巻いて、切っ先を己れの咽喉に突き通した。

「佐久間」

人々が駆け寄ると、佐久間の咽喉と口からは血が噴出し、背中が柱を伝ってずるずるとすべり落ち、そのまま畳の上にへたりこんで果てた。
　そのあとで、佐久間伝蔵が狙った堀口六左衛門が何も知らないで出勤した。堀口は息子を殺されたが、己れは遅刻のために命が助かったのである。

　検視の御徒目付には、佐久間伝蔵は発狂して刃傷に及んだと報告した。殺された堀口、高木の二人は生きたままの体（てい）で駕籠に乗せ、八丁堀の役宅に送り届けた、
　ほかの事件と違い、殺された役人を勤め先の奉行所から人目の多い昼間に出すわけにはいかないから、夜陰になって死体を搬出したのであった。
　浜中三右衛門が深尾平十郎に聞いた一件を鳥居耀蔵のところにさっそく耳打ちに行くと、耀蔵には以上のように駕籠の正体が、御徒目付からの報告でわかっていた。
　事件は、単に奉行所の下僚が発狂して同僚二人を斬ったというだけである。直接には奉行の矢部駿河守の責任にはならない。
　浜中三右衛門はせっかくの注進にもかかわらず、耀蔵が事件内容をこちらの知らないことまで詳しく知っているのにがっかりしたが、
「どうもちっとばかり筋が妙だな」
と、耀蔵はひとりで眼を光らせ、改めて考え込んでいた。
「御徒目付の報告には、佐久間伝蔵は気鬱ですっと引き籠っていたところ、久しぶりに出勤したそうな。　そこへ陽気の暑さが癒らない頭にきて、見さかいなく同僚を殺したというが、これは奉行所側の申立てをそのまま取り次いできただけだ。三右衛門、おまえ、この一件をほじくってみろ、あんがい、おもしろい筋が出るかもしれぬぞ」
.　おもしろい筋というのはもちろん矢部駿河守の責任になるような事情が裏に伏在しているかもしれぬ、それを探ってこい、と耀蔵は云うのである。
「だいたい、わしはそのうち、そのほうを御徒目付に推薦しようと.考えているのでな。」
耀蔵はぽつりと云った。
「え、あの、てまえを御徒目付に？」
「うむ、せいぜい励んでくれ」
「ありがとうございます。このうえは身を粉にしましても・・」
　御徒目付は働きの場のあるところだ。次第によっては、もつと出世ができる、三右衛門は感激して耀蔵を伏し拝んだ。
「委細かしこまりました」

５）駕籠訴

　刃傷事件の背景には、５年前の天保７年(1836)に南町奉行所で御救米買付にあたった仲間の中での確執、対立があったことは事実であったが、矢部はこの事件を「佐久間伝蔵の乱心」ですまそうとしていた。
　しかし、佐久間の妻かねはこの処理に不満をもった。　乱心などではなく堀口を討つ理由があったのだと主張し、老中の行列に駕籠訴したのだ。

三田村鳶魚の「捕物のはなし」の中で、駕籠訴について次のように記している。

一（前略）鳥居はさらに手を廻して、佐久間の女房を使って水野越前守に駕寵訴をさせ、矢部が勝手なことをしているのを裏書きさせた。矢部にはまさに、人を呪えば穴二つの結果になった。

（後略）

矢部の追い落としを模索していた鳥居が佐久間の妻をそそのかして老中水野越前守の行列に駕籠訴をさせたという。

また藤岡屋日記（弘化２年）の矢部定謙に関する記述の中に

一（前略）

６月２日駿河守御役宅、同人組同心佐久間伝蔵意趣有之、同堀口貞五郎、高木平次兵衛を及刃傷、其時貞五郎ハ即死、平次兵衛ハ深手存命、然ル処、伝蔵義乱心之趣二御届致、御徒目付之身分請、此一件事済候処、伝蔵妻かねと申者、夫伝蔵乱心二無之、深キ趣意有之趣、証拠書物を以**真田信濃守殿へ駕籠訴**候二付・・・

（後略）

とある。

三田村鳶魚は「水野越前守への駕籠訴」としているのに対し、藤岡屋日記では「真田信濃守へ」となっている。　三田村の著書は明治になってから伝聞をもとにして書いているのに対し、藤岡屋日記は事件当時の記事であり、藤岡屋日記の方が信憑性が高いと思われる。

真田信濃守幸貫は水野越前の推薦で天保 12 年６月 13 日に老中に就任した。　老中は譜代大名の中から選ばれる事になっているが、真田家は外様大名だ。　異例の人事であったが、これは幸貫が享保の改革で聞こえる松平定信の次男であり、更に８代将軍吉宗のひ孫である血統がものを言ったのであろう。

なお、この事件の判決が同年 11 月５日に申し渡されるが、この中で駕籠訴をしたとされる佐久間の妻かねに対して、次のように申し渡されている。

一お構いなし

当時遠山左衛門尉組与力給仕役豊田重三郎方同居

元同組同心佐久間伝蔵妻　かね　（36）

豊田重三郎　（44）

豊田重三郎はかねの実兄である。

三田村の著作では鳥居が矢野を奉行の座から引きずり落とすための画策の最終章として、刃傷事件を起こして自殺した佐久間伝蔵の妻をそそのかし、時の権力者である老中水野忠邦の登城時に「駕籠訴」をさせたとしている。

佐久間の未亡人かねはこの年、36 才。　夫伝蔵が仁杉五郎左衛門への忠誠心と、その後の奉行所の処置に怒り、刃傷事件を起こして自害して果てた後は、北町奉行所の与力給仕役をしていた実兄の豊田重三郎（当時 44 才）の家に身を寄せていた。

かねは奉行矢部駿河守の片手落ちの処分に不満があったようで、鳥居の指金で駕籠訴を決意した。
「駕籠訴」は文字どおり、駕籠で移動中の権力者に訴状を渡す行為で、これを行うと厳罰に処されたが、訴人が女の場合には比較的大目に見られることが多かったという。

ところでこの著作では水野の駕籠が半蔵門前を通るとあるが、この当時水野の上屋敷は西の丸下、お城に最も近い一等地の郭内にあったので半蔵門前を通る事はない。中屋敷も芝の方にあったので登城のために半蔵門前を通過することはなかったと考えられる。

なお、この他に駕籠訴があったという公式な記録は見つからず、駕籠訴の日付もわかっていない。
藤岡屋日記に五郎左衛門他が揚屋に送られたのが 10 月上旬とあるので、6月以降、10 月上旬以前の事と考えられる。

奉行所内で起きた刃傷事件には直接五郎左衛門は関係していない。 まだ新任の奉行は「佐久間伝蔵の乱心」で事件を処理しようとした。
しかし、この事件の背景には、５年前の天保７年に南町奉行所で御救米買付にあたった仲間の中での確執、対立があったことは事実であり、そのことが佐久間伝蔵の妻の駕籠訴によって公になってしまった。
この御救米買付にあたっての不正事件そのものは当時の慣習からいえば「とるに足らない（三田村鳶魚）」あるいは「不正といっても、叩けば埃がでるといった程度の不正で、目をつむればつむれる。目くじらを立てるような不正ではなかった。（佐藤雅美）」といわれる程度の犯罪、事件であった。
しかし、これが史書や小説などに取り上げられるような事件になったのは次の３つの理由があったと考えられる。
①たまたま町奉行の座をめぐって矢部駿河守、鳥居甲斐守などの旗本の権力争いがあり、相手を陥れるネタとしてこのお救い米事件が扱われたこと。
②五郎左衛門の部下の佐久間伝蔵が、仲間を裏切ったとして同じく五郎左衛門の部下だった堀口六左衛門の倅を奉行所内で刃傷に及び、不正があった事を明るみに出し、事を大きくしてしまった。
③この関係者を処分する時期がたまたま老中首座水野越前守が天保の改革を推し進めていた時期だったので、綱紀粛正の例を示す良い機会と考え、ことさら厳しい処分とした。